

演習室 第二期 研究ノオト401-3

第1稿 2007.05.19

※無断転載、無断引用を禁じます。

【ラキスト】

Susan L. Carruthers, “International history, 1900-1945” , John Baylis and Steve Smith, *The Globalization of World Politics*, Oxford University Press, third edition, 2005, pp. 62-91.

【構成】

01 Introduction

02 The origins of the First World War

(1) Germany’s bid for world power status

(2) The ‘Eastern Question’

03 Peacemaking, 1919: the Versailles settlement

(1) Post-war problems

(2) President Wilson’s ‘Fourteen Points’

(3) Self-determination: the creation of new states

(4) The future of Germany

(5) ‘War guilt’ and reparations

04 The global economic drisis, 1929-1933

05 The origins of the Second World War in Asia and the Pacific

(1) Japan and the ‘Meiji Restoration’

(2) Japanese expansion in China

(3) The Manchurian crisis and after

06 The path to war in Europe

(1) The controversy over the origins of the Second World War

(2) The rise of Fascism and Nazism in Europe

(3) From appeasement to war

07 Theorizing global history, 1900-1945

(1) Realism

(2) Liberalism / Idealism

(3) World systems theory

08 Conclusion: 1900-1945, an era of deglobalization?

## 【内容】

### 01 イントロダクション

ホブズボームの短い20世紀論、などもはさみつつ、話をはじめています。第1次世界大戦は世界史上最初の「世界規模」の「総力戦」であったこと、その防止を目的としたベルサイユ体制もやがて崩壊し、第二次世界大戦を迎えてしまったこと、そしてその過程で、ホロコーストと原爆という、人類史上最も破壊的な惨事を引き起こしてしまったこと、などです。この約50年の間をどう説明するか、ヨーロッパ帝国主義の没落、二大超大国の台頭、「危機の二十年」(カー)、「第二次三十年戦争」などといった表現にもふれています。

BOX3.1では「1900年の世界の特徴」、BOX3.2では「1945年の世界の特徴」を整理しています。

### 02 第一次世界大戦の起源

#### 要点

A ヨーロッパの不安定さの原因をたどると、1870年代にドイツが統一されたことで、それまでのバランス・オブ・パワーが乱されたことにさかのぼることができる。

B ヨーロッパ列強は、ドイツが植民地と市場を求めようになるにつれて、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、帝国主義的支配をめぐって衝突した。

C ヨーロッパの王朝のいくつかが崩壊状態にあり、もしこれらの帝国が解体した場合、そこに代わって生まれる領域や政治体制がどのようなものとなるのか、という点が未解決のまま残されていた。

D 同時に、特にバルカン半島や中央ヨーロッパではナショナリズムが高揚しており、衰退しつつあるオスマン帝国やオーストリア＝ハンガリー帝国(ハプスブルク家)では、ナショナリズム運動が独立を要求して盛んになっていた。

E 帝国主義、ナショナリズム、経済に関する緊張が合わさった結果として、とうとう第一次世界大戦が起きることになった。

この時期ヨーロッパが没落した原因として、第1にヨーロッパ内部における、1870年代以降のドイツの台頭、第2にヨーロッパ外部における、アメリカ、日本などの台頭をあげています。

#### (1) 世界大戦の地位をめざすドイツの挑戦

ビスマルク以降、ドイツ対英・仏・露、という対立の構図が出来上がります。ドイツは長く欧州列強の後塵を拝しており、独立も遅れ、帝国主義的進出も遅れた。そうした状況

から犠牲者意識を持ったドイツは、独立以後急速に発展し、北アフリカや中東をはじめとする帝国主義列強の争覇の場に参入していくわけだ。ドイツの強国化は、単に利益だけでなく、また単に自己意識の満足（名誉）のためだけでなく、その両方だった、という解釈だ。

第1次世界大戦の原因については諸説あり、ドイツひとりを悪者とみなす見解から、偶然であったという見解まで、さまざまだ。シュリーフェン・プランの果たした役割についても言及している。

## (2) 「東方問題」

オスマン帝国が衰退期に入ったことで、バルカン半島や中東にできたパワー・バキュームをめぐり、当該地での争いに列強の争いがリンクする形で問題が深刻化、これがセルビアでのオーストリア皇太子暗殺事件を引き金とする第1次世界大戦となる、という例の説明がなされます。

戦争はオーストリア＝ハンガリー、ドイツ対イギリス、フランス、ロシアという構図で進み、4年に及ぶ長期戦となり、多くの死者が出ました。1917年のアメリカ参戦、植民地の人々の戦争への動員（と多くの戦死者）にもきちっと触れています。ヨーロッパ諸国での革命の動きなどについてももう少し言及してよいのでは、と思ったりします。

それ以外では、第2次大戦のところでもそうなのですが、戦争そのものの成り行きと、それが各国の国内をどのように変えていったのか、といった点に対する記述が乏しいのがちょっと残念。

BOX3.3の「ドイツ問題」、これは便利だ。たとえば、1913年の人口は6700万人で、ロシアを除くとヨーロッパ最大だったとか、1914年には石炭、鉄鋼でイギリスを抜いたとか、1871-1914で農業生産は倍、工業は4倍、貿易は3倍に増えた、などだ。基本的に、ヨーロッパの記述に厚く、アジア太平洋の記述が薄い、というのがこの教科書の特徴なので、その意味ではこういう部分は便利に書けています。

## 03 1919年の和平、ベルサイユ講和（和解）

### 要点

A 第1次世界大戦後に結ばれた平和条約（ベルサイユ講和と称される）の文言の多くは、アメリカ大統領ウッドロー・ウィルソンが提出した「14か条」に基づいて生み出されたものである。しかしこの14か条それぞれ自身が、問題を抱えており、その適用も一貫性を欠いていた。

B 将来の戦争は、侵略国家に対して集団的な行動を起こす国際連盟によって防止されるはずであった。

C オスマン帝国やオーストリア＝ハンガリー帝国が崩壊したことで、それらの版図であった東欧や中欧には、たくさんの新しい国家が生まれた。ドイツの植民地だった領域や、崩壊したオスマン帝国の一部は、連盟の委任統治領となり、イギリスとフランスが管轄した。

D ドイツは、戦争を始めたという点で「有罪」とみなされた。ドイツはポーランドに土地を割譲し、アルザスニローヌ地域はフランスに返還された。ドイツは非軍事化させられ、ラインラントはフランスによって占領され、非武装化された（安全地帯となった）。そして、戦勝国に対して、賠償を払わなければならなかった。

E 多くの論者が、この和解には欠点があると批判をしているが、その批判は、ドイツに対して厳しすぎる、あるいは甘すぎる、というものである。

### (1) 戦後問題

戦争はアメリカ参戦、ソビエト革命と講和、ドイツ、オーストリアでの革命といった出来事を経て終結しますが、戦後の難問は数多く、ヨーロッパ全土が荒廃した。敗戦国ドイツに対する賠償、そしてドイツが二度とこうした野望を持たないようにするにはどうしたらよいか、といった点が焦点となったものの、合意形成は難航、リーダーシップをとったのは戦時需要によってさらに強力となったアメリカのウィルソン大統領だった。

### (2) ウィルソン大統領の14か条

ウィルソンの14か条は、自由貿易・市場の自由化を基礎に起っており、公開外交、国際連盟に基づく集団安全保障・紛争解決、民族自決などを骨子としている。国際連盟はこうした目的で創設された最初の国際組織である。

### (3) 民族自決：新たな国家の創出

14か条の中でも注目に値するのが、民族自決の権利に関する条項であった。とはいえ、そもそも、そこで使われている「人民」「市民権」、境界線に関する規定は曖昧であった。その結果、6000万人の人々が自分の国家を持つことが出来た一方で、2500万人のマイノリティを作り出す結果となった。しかもこれらの新興独立国は弱小国家が多く、政情も不安定であった。欧州列強が民族自決に異議を唱えた理由としては、ソ連の勢力伸長やドイツの再興の可能性といった点を憂慮していたことがあげられる。

民族自決に関する大きな問題点といえば、その適用範囲がヨーロッパ大陸に限定された、ということにある。植民地ナショナリストたちは失望した。ウィルソン自身、民族自決権を非白人に適用することに賛成であったとは言い難い。その後のアメリカの中南米、フィリピンへの進出と支配の強化などをみても、この適用範囲に関する姿勢は明らかである。中東に出来たパワー・バキュームへは、列強が新たに進出していくことになった。

### (4) ドイツの将来

ドイツは、領土割譲と多大な賠償に苦しむこととなった。フランスにはアルザスニローヌ、ザール、そしてラインラント非武装化と一部占領を許し、ポーランドにはダンチヒを（自由市という意味で）譲るなど、国土の13%、人口にして700万人を奪われる結果となった。このことと次の戦争責任返還に対する遺恨が、ヒトラーの台頭を生むことに

なった。

### (5) 「戦争に対する罪」と賠償

クレマンソーやロイド・ジョージら戦勝国側は、ドイツから搾り取れるだけ搾り取ろう、という考えから、過酷な賠償を課した。こうした姿勢は、ケインズなどから将来の禍根を残し、ヨーロッパを不安定にする危険があるという警告を生んだ。フランスのフォッシュ元帥が予言したように、ベルサイユは平和をもたらすどころか、次の戦争までの休戦をもたらしたただけだった、ということになった。このときの厳しい政策に対する反省が、30年代の宥和政策につながってくるが、ドイツに対する処置が厳しかったかどうかは別として、失敗に終わったということは間違いない。

BOX3.4 では、ウィルソンの14か条の要約を示しています。もう少し、戦後処理の問題を一覧にしたものとか、あとは国際連盟の機構についてといった図表があるとイメージがつかみやすかったかもしれないな、と思います。Fig.3.1 は欧州大戦後のヨーロッパの地図がありました。

## 04 グローバルな経済危機、1929-1933

### 要点

- A 産業革命以来、グローバル資本主義経済は発展してきており、世界のあらゆる場所をトランスナショナルな金融と貿易の流れに引き込んできた。
- B 第一次世界大戦はこの成長を阻害し、国際経済システムに甚大な負の影響を与えたが、1920年代のアメリカ経済の成長によって文字通りそのことが見えなくなっていた。
- C 1929年に、ウォール街の株式市場の暴落が世界恐慌を引き起こし、国民経済がいかにグローバルなシステムに織り込まれているかを明らかにした。
- D 世界中の多くの国々で起きた不況は、国力の強化をめざした過激派の政治運動をもたらし、より一般的には、内向きのナショナリズムと経済的な自給自足への強い要求を生み出した。

ここは項目分けはありません。まず、経済的覇権がイギリスからアメリカにうつったことを、1924年時点では工業生産で42%（アメリカ）対28%（英仏独）となる、などのデータから説明。経済のグローバル化をエンジェルを引きつつ指摘して、大恐慌を持った地球規模の衝撃を理解してもらおう、ということです。ワイマール時代のドイツを直撃したようなインフレ・停滞・失業・貧困が先進国を覆ったばかりではなく、一次産品を中心とした日本やブラジルにも影響が及び、その結果として保護主義が台頭、グローバリゼーションの進展も停滞する、と同時に、先進国ではヒトラー、ムッソリーニ、フランコが代表するような、また植民地ではガンジー、ホー・チ・ミンが代表するようなナショナリストの独立運動が、激しくなる、というまとめ方です。

Table 3.1 は、アメリカがヨーロッパに対して持っていた債権を時系列的に表現、BOX3.5 は第二次大戦までの米ソ両国の歩みを年表にしています。ソ連の歴史は、最近の学生にはあまりなじみがないかもしれませんが、こうした比較のできる表は効果的でしょう。

## 05 アジア・太平洋における第二次世界大戦の起源

### 要点

A 1868年以降、日本は急激な工業化と近代化の時期を経験し、その影響は社会的、経済的、政治的に重大な結果をもたらした。

B 新たな市場、天然資源、土地を、増加し続ける人工を養うために見出す必要から、日本は中国東北部への拡張を始めたが、中国は当時、延々と続く内戦状態にあった。

C 日本は、第一次世界大戦ではドイツと戦ったにもかかわらず、(ドイツと)同様に、戦後の和解に対して不満を表明し、力を伸ばしていった。

D 1931-1933年の間に、日本は満州の実権を強化し、「満州国」という傀儡国家を作り上げた。国際連盟は、これまでに直面した中でもっとも悪質なこの侵略行為に対して、最小限の対応しかしなかった。

E 1937年までに、日本は中国と全面戦争に入り、そのことによって、中国に対して強い帝國的な利害関心を持っていたアメリカとの関係が悪化した。1939年に、アメリカが石油やそのほかの死活的に重要な戦略物資の輸入にたいして制限をかけると、この2つの大国の関係は急激に悪化した。その結果が、1941年の真珠湾攻撃につながった。

まず、第2次世界大戦の始点について論争があることを明記した上で、アジアにおける日本と、ヨーロッパにおけるドイツが、比定可能な関係にある、と指摘しています。

### (1) 日本と「明治維新」

日本は植民地化される可能性もある状況下で、工業化と近代化に励み、いちおうの成功を収めた。しかし今度は、国内の余剰人口のはけ口、資源の獲得先、廉価な労働力、市場をもとめて対外膨脹政策をとることになった。

### (2) 日本の中国への拡大

中国では清朝が没落期に入り、辛亥革命以降、統一は1949年までお預けとなって、孫文、蒋介石対毛沢東、軍閥の利権争いなどで分裂状態にあった。列強もまた、中国での利権をめぐる争っており、イギリスとロシア、そして20世紀に入るとアメリカが、大きく関与するようになった。日本は日清、日露戦争での勝利、第一次世界大戦への参戦などを通して勢力を固めていった。

日本は戦勝国であり、ドイツは敗戦国であり、両者は青島で交戦しているが、双方ともに、ベルサイユ体制に不満を抱いていた。日本は人種平等条項が会議で容れられず、移民法改正で移民の締め出しを食い、ワシントン体制を軸とした軍縮の枠組を受け入れた。

20年代には関東大震災と大恐慌の影響が及んだ(昭和恐慌)が日本を襲った。国際協調主義者や連盟主義者も活躍したが、こうした国内外での不安や不満が、軍部や急進派の台頭を招いていき、最終的には「共栄圏」という名の下での覇権を、神道に根ざしたナショナリズムを基礎に追求していくことになった。

ここのところ、たとえば日清戦争がなぜか抜けているとか、韓国併合などの朝鮮半島をめぐる情勢、台湾への言及もないなど、日本の視点から見るとずいぶんぼつりと切り捨てられてしまっている、という印象は否めません。なお、「拡大」は、**expansion**が原語です。

### (3) 満州事変とその後

1931年に柳条湖事件をきっかけに満州事変勃発、1932年には傀儡国家「満州国」建国、となります。国際連盟はリットン調査団を派遣して報告書を作らせるものの、強制措置はとりませんでした。この連盟の処置については、強硬措置があっても日本の武力行使は止まらなかったかもしれないが、なかったことによって侵略を加速させた、と評価しています。

1937年には日中戦争が本格化、日本は「東亜新秩序」の建設をスローガンとしています。アメリカは徐々に態度を硬化させて、石油の禁輸などに代表される制裁措置をとり、これに苦しんだ日本は、資源の豊富な東南アジアに活路を見出した。

さて、ここで真珠湾攻撃と9.11を比定して、両方とも、相手の意図をどこまで知っていたのか、という点についてさまざま議論がある、という例をあげています。ドイツと日本を比定して、レーベンスラウムと東亜新秩序や共栄圏を比定するのはいいのですが、どうなんでしょうか、9.11と真珠湾攻撃を比定する、というのは、アカデミックな見方として妥当なのかどうか、この話が出る度にちょっと疑問に思います。たしかに「意図をどこまで知っていたのか」=「知っていながらやらせたのではないか」という推測が可能である(それがどこまで説得的かどうか、実証できるかどうかは別として)という点について両者を比較したくなることはわかりますが、国家と国家の戦争と、国家対非国家のテロを、留保なく比定するというのは、ある種、自爆テロと特別攻撃隊をやはりあまり厳密な留保なく比定するのと似た面があるような気がします。ハンライントンが、9.11は文明の衝突ではない、と言ったように、9.11は21世紀の真珠湾攻撃である、という短絡な議論を避ける必要が、少なくともアカデミズムの議論としてはあると思います。

1941年12月8日以降、第二次世界大戦はグローバル化する。フランスは本土がドイツの支配下に入り、仏印は日本に従属する、イギリスは本土は防衛したものの、ビルマ、マレー半島などを日本に奪取された。

BOX3.6、これは致命的なミスですね。満州事変勃発の年が、「18 Sept. 1930」となっています(77ページ)。いちいち文句は言いたくないですが、もうちょっと慎重に書いて

ほしいものです。

## 06 ヨーロッパでの戦争への道程

### 要点

A 第二次世界大戦の起源は、歴史学（歴史解釈）における顕著な論議の対象となってきた。歴史家たちは、ヒトラーがどの程度実際に戦争を計画していたのか、ヒトラーが1939年に始まった戦争をどの程度の規模になると見通していたのか、ナチスの領土拡張主義が実際にどの程度まで野心的だったのか（ヨーロッパでの覇権か世界の支配か）、といった点についていまだに論争している。

B イタリアとドイツで実際に行われた、ファシズムとナチズムは、それぞれの社会を完全に再編し、私的な領域を完全に抹殺した。対外政策の点では、ベルサイユ条約を修正する範囲を遙かに超えた野心的な計画が描かれていた。

C 中国、アビシニア（エチオピア）、ヨーロッパでの数多くの国際的な危機に直面して、イギリスとフランスの政策担当者たちは、ヒトラーを宥和する政策を採用した。

D 1939年3月にドイツがプラハを占領すると、宥和（政策）は破棄され、1939年9月に、ドイツがポーランドに侵攻すると、イギリスとフランスは、ドイツに宣戦を布告した。

イタリアのアビシニア（エチオピア）侵攻、ドイツの再軍備化・ラインラント進駐、スペイン内戦、ドイツのオーストリア、チェコスロバキア、ポーランドの併合や宣戦布告、という一連の流れから、第二次世界大戦が始まります。

### (1) 第二次世界大戦の起源をめぐる論争

第二次世界大戦の原因としては、第1にこれが第一次世界大戦の継続であったという面、第2にという個人の存在がもたらした、という面をあげることができます。ここでA. J. P. テイラーの、オポチュニストとしてのヒトラー、という有名な主張をとりあげつつ、ヒトラーがどの程度この戦争を意図し、計画していたか、という点に関しては、長期的な計画と短期的な柔軟な対応が組み合わさっていた、とやや玉虫色のまとめ方になっています。

### (2) ヨーロッパにおけるファシズムとナチズムの台頭

ここはさすがにヨーロッパの教科書だけあって詳しいです。

ナチズムにせよファシズムにせよ、人民の不安と政情不安定が生み出したものである。1922年に政権の座に着いたムッソリーニのファシズム、あるいは全体主義の特徴として、労働組合や野党の解散、コーポラリズムと個人崇拜（イル・ドゥー・チエ、フューラー）といったことをあげています。ムッソリーニはアドリア海の覇権の掌握、そしてアビ

シニア侵攻を皮切りとする「新ローマ帝国」建設の野望を持ち、この一連の動き（とそれに対する連盟や欧米列強の対応）がヒトラーに影響を与える、という解釈です。

いっぽう1933年に政権の座に着いたヒトラーのナチス・ドイツについて。人々の生活の全領域に支配がおよび、不平分子や差別の対象となったユダヤ人などを収容所送りにするなどして排除、出産までもコントロールしようとする（ムッソリーニの「出産は女性の愛国主義的行為である」がここで引用されます）。ムッソリーニとヒトラーの相違点は、反ユダヤ主義や、「生活圏」（レーベンスraum）の確保、「東方への衝動」、（東欧の）「下等人種」を支配しても良い、といった考え方が代表する、ねじ曲がった社会ダーウィニズムにある、と指摘しています。

### （3）宥和から戦争へ

第二次世界大戦の可能性は、ヒトラーの自伝『我が闘争』にすでに予告されていることであつた。戦争はなぜ、止められなかったのだろうか、という問いかけから、宥和政策の話にもっていらっています。

宥和政策に対する評価は、戦後の第一世代が最も辛辣であり、次の世代は、相次ぐ紛争が頻発する状況の中で、満州、エチオピア、スペインなど多方面に対処しなければならなかったこと、第一次世界大戦の記憶が強攻策をためらわせ、また宥和することによって戦争準備の時間稼ぎをした、といったやや寛容な解釈を出した。とはいえ、こうした宥和に対する好意的な解釈は、そもそも宥和政策をとる側にどこまで先が見えていたのか（そこまで計算した結果の行動だったのか）という疑問があります。また、ラインラント進駐以降のヒトラーの意図を過小評価していたのではないか、という疑問が、宥和政策に対しては向けられます。

ラインラント進駐、オーストリア併合、ズデーレン併合、このタイミングで開催されたミュンヘン会談で、「われわれの時代の平和」（チェンバレン）という名の宥和がなされたものの、翌年チェコスロバキア併合がなされたことで宥和政策は終わりを告げ、ポーランド侵攻を期に大戦に入っていく、というわけです。

BOX3.7 は「ヨーロッパでの第二次世界大戦の起源」に関する年表。

## 07 1900-1945年のグローバルな歴史を理論的に説明する

### 要点

A 国際関係論における3つの支配的な理論的伝統は、1900-1945年の時期に起きた大規模な歴史的事件に対して、それぞれがまったく異なる解釈を提示する。

B リアリスト（現実主義者）は、国家が領域、軍事、経済的な資源を得るために自己利益を手段を選ばず追求する点を協調し、リベラル・アイデオロジスト（理想主義者）は、結局は実を結ばなかったように見えても、戦間期の国際主義を育てる努

力に注目する。世界システム論者は、自らの立場としては、グローバルな資本主義経済が、国家や人々が近接性の位置を代える（今までと異なる場所や人を結びつける）役割を重視する。

ここでなんだか、とってつけたような、「歴史」を「理論」で説明すると理論によってこうも違う、という話が出てきます。ややナイの『国際紛争』的ですね。まあ、話としては、歴史の物語に潜むバイアス、に気付いてほしい、といった意図があると思いますし、また、後の章でやる、それぞれの理論についての前振りにもなっている、ということでしょう。

まず、ここまでの説明は国家中心的であり、伝統的な見方である。それ以外に3つの見方がある、という風に説明しています。

### (1) リアリズム

リアリズムの視点からみると、国際社会は諸国の国益の衝突に他ならず、アナーキーな国際社会では戦争は起きるものである。第二次世界大戦はパワーの構造、配分が変化したことによって生じたのだ、という話になります。むしろここまでの説明が古典的リアリズムに近く、ここでの説明はむしろ構造的リアリズムに近いのではないかな、という気がするのですが(カーやモーゲンソーをひいている部分はともかく)、とにかくそう説明をしています。

### (2) リベラリズム／アイデアリズム

人類は生来協力する生物であって、こうした時代でも国際主義の余地があった。サブ国家レベルでのトランスナショナルな社会・政治運動の発展としてこの時代を見るのが、リベラリズム／アイデアリズムである、という整理です。TSM (transnational social movements) の原型云々というのはわかりますが、こういう説明だと、リアリズムとリベラリズムは注目する主体が二項対立的に違う、という風に受け取られてしまうような気がします。むしろ当時の国際主義がいかにTSMと違うか、ということ、ナショナルな価値と国際主義が手に手を取って進もうとしていた部分の方が主だったのではないか、と言いたくなります。主体の水準がどこであろうとリアリズムはリアリズムであり、リベラリズムはリベラリズムであるはずだと、個人的には思います。そこを切り離す必要を、感じました。

### (3) 世界システム論

グローバル資本主義経済は500年の歴史を持っており、1900-45年はその中で特別な時代とは言えない。むしろ1890年代以降からとらえて、この時期はイギリスからアメリカへの覇権の移行期である、ととらえるべきであり、何度かの戦争を経ながらアメリカが主役となっていく時期、とみなしうる、という整理です。

コンストラクティビズムはここでは使わないのかな、ということもありますが、この3つは、比較対照しやすいという意味で便利なのであげている、ということなのかな、と思ったりします。

## 08 結論：1900-45年は、反グローバル化の時期か？

尤恐慌やブロック経済の進展といったことを考えると、この時代はグローバリゼーションが停滞、退行した時期なのではないか、という見解もありますが、そもそもグローバリゼーションは進んだり滞ったりすることを繰り返すのであって、トータルで見れば進んでいたんだ、ということも、イアン・クラークを使いながら説明しています。

その具体例としては、ラジオ、映画、国際放送、音楽、工場生産システムなどの世界規模での流通に代表される「時間と空間の圧縮」の進展、消費に支えられた文化帝国主義的な、アメリカなどの生活様式の浸透と崇拜の創出、これに対する文化の保護の動き、などをあげています。

ヒトの移動に関しても、個人レベルでの移動の激化が見られ、お金持ちの観光、移民（1891-1920の間にヨーロッパを出発した移民は2700万人、1920年のアメリカの居住者の1/7は移民）などがその代表例です。ただし強制労働などによる不本意な移動も多く発生したことも付け加えています。

こうした一連の出来事は、世界の一体感に対する自覚を意識的に（ないしは強制的に？）人々に芽生えさせることになった、とまとめています。

この最後の箇所では、グローバリゼーションを重視する本書の特色が生きていると思います。望むらくは、この部分での指摘や趨勢をベースにして、つまりこのような補足的な書き方ではなく、この時代を描けないかなあ、ということもふと思わされた次第です。

【コメント】

(芝崎 厚士)